



**ソフトバンクグループ株式会社**

2022年3月期 第3四半期 決算説明会

質疑応答

2022年2月8日

## 免責事項

本資料は、ソフトバンクグループ株式会社（以下「SBG」）及びその子会社（以下 SBG と併せて「当社」）並びに関連会社（以下当社と併せて「当社グループ」）に関する関連情報を提供するものであり、すべての法域において、いかなる証券の購入又は応募の申込みを含む、いかなる投資勧誘を構成又は形成するものでもありません。

本資料には、当社グループの推定、予測、目標及び計画を含む当社グループの将来の事業、将来のポジション及び業績に関する記述など当社グループの将来の見通しに関する記述、見解又は意見が含まれています。将来の見通しに関する記述には、特段の限定を付すことなく、「目標とする」、「計画する」、「確信する」、「希望する」、「継続する」、「期待する」、「目的とする」、「意図する」、「だろう」、「かもしれない」、「であるべきである」、「したであろう」、「できた」、「予想する」、「推定する」、「企図する」若しくは類似する内容の用語若しくは言い回し又はその否定形などが含まれています。本資料に記載されている将来の見通しに関する記述は、当社グループが本資料の日付現在において入手可能な情報を踏まえた、当社グループの現在の前提及び見解に基づくものです。これら将来の見通しに関する記述は、当社グループのメンバー又はその経営陣による将来の業績の保証を意味するものではなく、当社グループのビジネスモデルの成功、当社グループの資金調達力及びその資金調達条件の影響、SBG の重要な経営陣に関するリスク、当社グループの投資活動に関する又はこれに影響を与えるリスク、SB ファンド（下記で別途定義）並びにその投資、投資家及び投資先に関するリスク、ソフトバンク株式会社及びその事業の成功に関するリスク、法令・規制・制度などに関するリスク、知的財産権に関するリスク、並びに訴訟を含むこれらに限られない既知及び未知のリスク、不確実性その他要因を含み、これらの要因により、実際の当社グループの実績、業績、成果又は財務状態は、将来の見通しに関する記述において明示又は黙示されている将来の実績、業績、成果又は財務状態と著しく異なる可能性があります。当社グループの実績、業績、成果又は財務状態に影響を与える可能性のあるこれら及びその他の要因については、SBG のホームページの「事業等のリスク」

([https://group.softbank/ir/investors/management\\_policy/risk\\_factor](https://group.softbank/ir/investors/management_policy/risk_factor))をご参照下さい。当社グループ及びその経営陣は、これら将来の見通しに関する記述に明示されている予想が正しいものであることを保証するものではなく、実績、業績、成果又は財務状態

は、予想と著しく異なる可能性があります。本資料を閲覧する者は、将来の見通しに関する記述に過度に依存してはなりません。当社は、本資料に記載される将来の見通しに関する記述その他当社が行う将来の見通しに関する記述を更新する義務を負いません。過去の業績は、将来の実績を示すものではなく、本資料に記載される当社グループの実績は、当社グループの将来の実績の予測又は予想の指標となるものではなく、又はこれを推定するものでもありません。

本資料に記載されている当社グループ以外の企業（SB ファンドの投資先を含みますが、これに限られません。）に関わる情報は、公開情報等から引用したものであり、当社は、情報の正確性又は完全性について保証するものではありません。

## 商標について

本資料に記載されている企業、製品及びサービスの名称は、各企業の商標又は登録商標です。

## 重要なお知らせ—SBG の普通株式の取引、スポンサーなし ADR（米国預託証券）に関する免責事項

SBG の普通株式の売買を希望する場合には、当該普通株式が上場され、主に取引が行われている東京証券取引所において売買を行うことを推奨します。SBG の開示は、スポンサーなし ADR（以下「ADR」）の取引の促進を意図するものではなく、ADR の取引判断を行う際にこれに依拠すべきではありません。SBG は、SBG の普通株式に関するスポンサーなし ADR プログラムの設立又はそれに基づき発行される ADR の発行若しくは取引について、過去及び現在において、参加、支援、推奨その他同意を行ったことはありません。SBG は、ADR 保有者、銀行又は預託機関に対して、(i)SBG が 1934 年米国証券取引所法（以下「証券取引所法」）で定めるところの報告義務を負うこと、又は、(ii)SBG のホームページに、SBG が証券取引所法ルール 12g3-2(b)に従って証券取引所法に基づく SBG の普通株式の登録の免除を維持するために必要な全ての情報が継続的に掲載されることを表明するものではなく、また、当該者又は機関は、そのように信じてはなりません。適用

ある法が許容する最大限の範囲において、SBG 及び当社グループは、SBG の普通株式を表象するスポンサーなし ADR に関連して、ADR 保有者、銀行、預託機関その他企業又は個人に対するいかなる義務又は責任を否認します。

上記の免責事項は、ソフトバンク株式会社や Z ホールディングス株式会社などの、スポンサーなし ADR プログラムの対象であるか又は将来対象となる可能性のある当社グループの証券に同様に適用されます。

### **本資料に記載されるファンド情報に関するお知らせ**

本資料は、情報提供を目的として提供されるものであり、法律上、税務上、投資上、会計上その他の助言又は SB Global Advisers Limited（以下「SBGA」）、SB Investment Advisers (UK) Limited（以下「SBIA」）、SBLA Advisers Corp.（以下「SBLA」）及びそれらの関係会社を含む SBG の子会社（以下併せて「SB ファンド運用会社」）により運用されるいずれかのファンド（文脈に応じて、パラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて「SB ファンド」）のリミテッド・パートナーシップ持分又は同等の有限責任持分の販売の申込み又は申込みの勧誘を行うものではなく、また、いかなる方法でもそのように依拠してはなりません。疑義を避けるために付言すると、SB ファンドは、他のファンド同様、それぞれ SBIA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund L.P.（文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて以下「ビジョン・ファンド 1」または「SVF1」）と、SBGA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund II-2 L.P.（文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて以下「ビジョン・ファンド 2」または「SVF2」）を含み、また、SBLA とその関係会社によって運用されている SBLA Latin America Fund LLC（文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて以下「ラテンアメリカ・ファンド」または「LatAm Fund」）を含みます。

SB ファンド（ビジョン・ファンド 1 及びビジョン・ファンド 2 並びにラテンアメリカ・ファンドを含む）、SB ファンド運用会社、SB ファンド運用会社により運用される後続又は将来のファンド、SBG 又はそれぞれの関係会社のいずれも、本資料に記載されている情報の正確性又は完全性について、明示又は黙示であるにもかかわらず表明又は保証するものではなく、また、本資料に記載されているパフォーマンスに関する情報は SB ファンドその他本資料に言及される企業の過去若しくは将来のパフォーマンス又は SB ファンド運用会社により運用される後続ファンド、将来組成されるファンドの将来のパフォーマンスについての確約又は表明として依拠してはなりません。

SB ファンドその他本資料に言及される企業のパフォーマンスに関する情報は、背景説明のみを目的として記載されるものであり、関連する SB ファンド、本資料に言及されるその他のファンド又は SB ファンド運用会社により将来運用されるファンドの将来のパフォーマンスを示すものとして考慮されるべきではありません。SB ファンドの特定の投資対象に関する情報への言及は、それに含まれる範囲において、関連する SB ファンド運用会社の投資プロセス及び運用方針を説明することのみを目的として述べられたものであり、特定の投資対象又は証券の推奨として解釈してはなりません。SB ファンドのパフォーマンスは各個別の投資においてそれぞれ異なる可能性があり、個別に言及した取引のパフォーマンスは、必ずしも全ての適用される従前の投資のパフォーマンスを示唆するものではありません。本資料において記載及び説明される特定の投資は、関連する SB ファンド運用会社が行う全ての投資を示すものではなく、本資料において記載及び検討される投資が利益を生んだ又は将来利益を生むと仮定すべきではありません。

本資料に記載される SB ファンドのパフォーマンスは、ポートフォリオ投資の未実現の評価額に基づくものです。未実現の投資評価額は、関連する SB ファンド運用会社がそれぞれ特定の投資に関する状況に基づき合理的とみなす前提及び要因（例えば、評価日現在における類似の会社の平均株価収益率その他勘案事項等を含みます。）に基づくものです。しかしながら、未実現の投資評価額が本資料に記載されている金額又は本資料に記載されているリターンを算定するために用いられる金額で実現されるという保証はありません。また、かかる実現に関連する取引費用が未知であるため、当該取引費用は、かかる算定に含まれません。未実現額の見積りは、常に変化する多くの不確定要素の影響を受けます。関連する SB ファンドの未実現の投資に対する実際の実現リターンは、いくつかの要因があ

る中で特に、将来の運用実績、処分時の資産価格及び市況、関連する取引費用並びに売却の時期及び方法によって決まるものであり、これらの要因は全て、関連する SB ファンド運用会社の評価の根拠となった前提及び状況と異なる可能性があります。

過去のパフォーマンスは、必ずしも将来の実績を示すものではありません。SB ファンド又は SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドのパフォーマンスは、本資料に示されるパフォーマンス情報よりも大幅に低くなる可能性があります。各 SB ファンド又は関連する SB ファンド運用会社により運用されるいずれか将来のファンドが、本資料に示される実績と同等の実績を達成するという保証はありません。

本資料に記載される第三者のロゴ及びベンダー情報は、説明目的のためにのみ提供されるものです。かかるロゴの記載は、かかる企業又は事業との提携又はその承認を示唆するものではありません。SB ファンド運用会社、SB ファンドのポートフォリオ会社、SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドの将来のポートフォリオ会社、又は SBG が、本資料に記載されるロゴを有する企業又は事業のいずれかと今後業務を行うという保証はありません。

SBGA、SBIA 及び SBLA は、ビジョン・ファンド 2、ビジョン・ファンド 1 及びラテンアメリカファンドの運用に関して、相互に SBG からそれぞれ別個独立した業務プロセスを採っています。SBGA、SBIA 又は SBLA によって運用される SB ファンドは、それぞれ SBGA 単独、SBIA 単独又は SBLA 単独で運用されています。

## 質疑応答

---

**質問者 1：**先日マルセロ・クラウレ副社長が退社されました。いろいろな報道もあったかと思いますが、こちらの背景をあらためてお聞かせください。

**孫：**スプリント、ウィーワークなど、ソフトバンクグループ株式会社（以下「SBG」）が抱えていた難しい問題を処理するというので、非常に貢献をしてくれました。SBGの事業内容が、AI革命の資本家になるというビジョンのもと、今、次のステージに移っていますが、そういう状況の中で、経営の内容も次のステージに移っていく。お互いに、ここで1回区切りをつけようということで合意しましたので、先日、彼の退任を発表しました。マルセロも大変有能な人物ですから、新しい人生でも大いに成功してくれると信じています。

**質問者 1：**ソフトバンク・ビジョン・ファンド（以下「SVF」）2の出資コミットメント総額が、前は420億ドルぐらいだったのが、今回また増えていますが、これは今後どれくらいまで増やしていくのか。先ほども少し説明がありましたが、昨年来、暗号資産やブロックチェーンなど、Web3の領域への投資が増えていると思いますが、これも今後増えていくのか、この分野に対してどのような期待をしているのか、お聞かせください。

**孫：**SVF2の出資コミットメント総額は、SBGがSVF1に投資した金額をすでに上回っていますし、これからも継続して着実に増やしていきたいと考えています。1社あたりの投資金額はSVF1のころに比べて、だいぶ小さくなっていますから、大振りの狙いというよりは、若干早めに球を打って、やや小さめのパーセンテージを狙う。SVF1のときは30%ぐらいを狙うために、上場直前の大きな銘柄を狙っていました。投資金額もSVF1のときは、1件当たり1,000億ぐらい投資していましたが、SVF2は100億から200億ぐらいの金額を投資しています。最近の保有割合は10%から15%ぐらいが平均的になっています。そのほうが入りやすいし、イグジットもしやすいということになるので、より回転しやすくなると考えています。

投資先は、Web3の分野も最近増えてきていますし、とにかくAIを使って世の中を革新するユニコーン軍団、あるいはユニコーン直前のところに集中的に投資するという基本方針は変わりません。売りながら投資をしていくということですから、上場してある程度価値が付いて利益が出たら、徐々に売却して、資金化をしながら、未上場の会社にまた投資をする。このサイクルを、先ほどから言っている財務規律、Loan To Value（以下「LTV」）で25%前後までで止めること。それから、社債償還資金2年分を、現金で常に持つておくこと。この財務規律を守れる範囲であれば、SVF2の投資案件は着実に増やし続けていくかたちになります。

**質問者 2：**アーム買収時の価格が3兆円強だったと思うのですが、現在の価値はどれぐらいで見ている、IPOを目指す上で、エヌビディアに売却するよりも高い評価が得られるとお考えですか。

**孫：**アームを買収したときは32ビリオンドル、約3兆円少しという金額でした。エヌビディアとの合併を条件に、売却することを合意したのは、成果報酬を含めて40ビリオンドル、約4兆円ということでした。そのうちの3分の1が現金、3分の2は、エヌビディアの株式と交換するというディールでした。32が40になり、40のうちの5ビリオンぐらひは成果報酬が含まれていました。この成果報酬を得られるかどうかというと、アームは第2の成長期に入り21年度の達成目標については、売上も利益も、満額回答の成果報酬に到達できる状況に入っていました。つまり、40ビリオンドルが達成できる状況でした。ただ、40ビリオンの中の3分の2は、エヌビディア株であり、合併が成就すれば、同社の筆頭株主になるという状況でしたが、今日現在のエヌビディアの株価に直すと、現金プラス同社の株が、約80ビリオンを超えるようなところまでできていました。ですから、われわれが買収したときの32ビリオンの買収価格に対して、その10分の1の価格でも高すぎるのではないかというコメントも一部ありましたが、32ビリオンが40ビリオンになり、40ビリオンがエヌビディアとの合併で、80ビリオンを超えるところまで上がってきていた。上場後の株価がどのぐらいになるかは、市場が決めることで、私が決める金額ではないですが、少なくともアームがこれから第2の成長期、黄金期に入ると心から確信していますので、そういう意味では、われわれが持っていてよかったという金額になっていくと考えています。

上場の第1日目でどのぐらいかというのは、やってみないと分かりませんが、そこからさらに2年後、3年後、5年後という時間の経過とともに、アームの利益も価値もどんどん増えていく、大変な黄金期をこれから迎える。1年、2年ではなくて継続的に利益が伸びていく、2次曲線で伸びていくと私は信じています。

**質問者 2：**アームが非常に競争力のある会社であることは分かったのですが、再上場をせずにと持っておくという選択肢はないのでしょうか。SBGに今のところ財務上の問題がないのであれば、なぜ資金化するのか、あらためて教えてください。

**孫：**現在、アーム株式の25%はSVF1が持っています。SVF1には外部の投資家もいますので、彼らのためにも、上場株としての価値を作るというのは使命の一つになると思っています。2番目は社員です。社員に十分なインセンティブを与える。特にアームはエンジニア中心の会社です。彼らの労に報いるために、インセンティブの一環として、上場株のストックオプションなどを提供していきたいと考えています。3番目は、これだけ社会のインフラを担うような会社になり、各国の政府も気にしているような会社になるわけですから、できるだけ透明性を確保した経営をやっていく。そういう意味でも、上場会社として、独立してやっていく方がベターだと考えています。

以上がわれわれが再上場を目指す理由で、これは買収した第1日目から一貫して申し上げていた通りです。

**質問者3**：アームの再上場は、どこの株式市場をお考えですか。

**孫**：米国で上場したいと考えています。おそらく、ナスダックじゃないかなと思っていますが、現在はナスダックを中心とした米国での上場で考えています。

**質問者3**：アームが今後活躍できる場として、メタバースを強調されていましたが、以前、孫さんはインターネットが国籍というようなことをおっしゃっていたと思います。メタバースが第2のインターネット、新たなインフラみたいな叫ばれ方をしていると思うのですが、今回のお話でも、投資を通じてメタバースに関わるようなお考えだったと思います。孫さんとメタバースの方の関わり方について、お考えをお聞かせください。

**孫**：メタバースは、これからいろいろな進化、姿かたちを変えながらどんどん広がって行って、一つの新しい社会のカルチャーといいですか、生活様式、ライフスタイルになっていくのではないかと考えています。そのための要素技術がそろってきましたし、その流れについては間違いなく起こっていくのだろうと。

メタバースの会社には、SVFを通じてどんどん投資をしていくことになると思います。なぜなら、彼らはAIをいろいろな意味で、どんどん活用していく企業になっていくということで、メタバースのプラットフォームあるいはサービスを提供する会社には、直接、資本家として資本を投入する。

また、メタバースを構成するためには、クラウドコンピューティング、あるいはエッジコンピューティングが必要で、これから2次曲線でどんどん需要が増えていくことになる。これからアームの黄金期に入るという意味では、メタバース大歓迎ということです。

**質問者4**：アーム売却のディールについて、中間決算のときに孫さんは、審査が無事通るのではないかと、うまくいくと信じているというお話をされていたかと思うのですが、今回、契約解消に至ったということで、この間、アメリカでの提訴などもありましたが、何か決め手になったことがあったのか。合併が難しいと、規制上の課題がなかなかクリアできないという結論に至った経緯などを、もう少し詳しく教えてください。

**孫**：アメリカ政府による独禁法の訴訟が方向として明確になってきたこと。それからイギリス、EUなど、各国の政府、規制当局が非常に強い反対と言いますか、懸念を表明しているという中

で、われわれはそれに対する解決策として、エヌビディア側で素晴らしい解決策をいくつか提案していましたので、これなら当然、規制当局も納得するだろうと私も思いました。

これはいけるのではないかと心から信じていたわけですが、そういうものをいろいろ提案しても、各国の政府からはまったく相手にしてもらえないという状況がこの2~3カ月続いていましたので、これ以上は難しいだろうとエヌビディアのほうから話があった。彼らもいけると信じていたのですが、お互いにこのところ、急激に難しいなという状況に追い込まれたということです。

**質問者 5**：12月末時点は財務規律の範囲で投資されていたのは理解したのですが、1月も相変わらず市場が動揺している中で、投資に少しブレーキをかける、あるいは、2つの重要指標以外に考慮していることがあれば、あらためて足元の状況を踏まえて、SVFの投資方針を教えてください。

**孫**：基本的には財務規律 NAV と LTV の2つの重要指標をしっかりと守れる範囲で投資をする。投資先企業側も株式市場の状況を見ているが、上場市場が安くなっているのに、未上場の会社が要求する金額規模が高すぎるのではないかと、バリュエーションを下げるべきだと。こういうような議論が最近だいぶ出てきていますので、資金調達をする側の企業、あるいはわれわれ以外のベンチャーキャピタルも最近、交渉をし直すという局面が増えてきています。われわれも案件そのものが若干減る。あるいは、小口の金額になりつつあるという状況はあります。

従って、去年の年初あるいは中間のころに比べると、金額あるいは件数が、今年に入ってから若干減ってくるのではないかなという状況はあります。ただ、これはわれわれにとっては入口の金額が高すぎると、あとで上場したときに利益を乗せにくいのですが、入口の金額がやや安くなるというのは、のちのちの成績を上げるためには決して悪いことではないので、それをにらみながら今、やっている。

投資はずっと継続して行っていますが、ペースあるいは金額は若干下がってきているかなという感触です。われわれは手元資金が回る範囲の中で、バランスを見ながらやっている。

**質問者 5**：昨年未あたりに一部の海外報道で、SVFが保有しているユニコーン株自体を担保にして資金調達するのではないかとという観測報道が出たと思うのですが、それについて今のお考えや取り組み状況があれば教えてください。

**孫**：SVFで保有している上場株、あるいは未上場株を担保価値として、健全な範囲の中で資金を提供したいというオファーもいくつかありますので、そういうものについては、SVFの価値が有効活用できるのであれば、ちょうど渡りに船ということで、一部活用をするように進めているところです。

**質問者 6：**アーム売却のディールについて、2 問前の質問の回答で、いけるかなと思ったが、急激に難しくなったとおっしゃっていましたが、エヌビディアとのプラン A を約 1 年半で諦めざるを得なくなった点について、孫さんの率直な思いをあらためてお聞かせください。

**孫：**率直にということ言えば、これほど各国の政府、あるいは業界の中心の会社が反対に回ることは想定してなかったもので、そこは想定外でした。エヌビディア側もそれは驚いているという状況です。

ただ、今となってみれば、先ほどから長々と説明しましたが、アームがいよいよ黄金期に入るといふことで、合併の承認は出ないが、われわれとしてはプラン B も、むしろそっちの方が良かったかもしれないと、これから思えるのではないかな。そのくらい、これからの第 2 の成長期、アームの単独上場を楽しみにしているということです。

**質問者 7：**SVF の日本株投資について、いくつかの企業に投資をしているところがあるかと思うのですが、中国企業の投資環境が難しい中で、日本企業への投資についてどう考えているのか、あらためてお聞かせください。

**孫：**最近、2 社ほど投資を行いました。日本は AI の活用が非常に遅れていると、懸念を何回か申し上げましたが、いよいよ日本からも AI を活用した素晴らしい会社が生まれつつあり、何社か今、着目しているところです。交渉も開始していますし、日本の投資専門のチームも結成中ということで、ちょっと楽しみにし始めたということです。

**質問者 8：**先月、副社長のクラウレさんが退任したという話がありました。、孫さん自身、これまで後継者探しが最重要課題であるとおっしゃっていたと思うのですが、現時点でそのお気持ちについて、今後の方針についてお聞かせください。

**孫：**後継者探しは大変重要なテーマだという思いは変わりません。これは必ず見つけます。必ず育成します。ただし、今は僕自身が SVF、そしてこの、新たにアームということで、もうエキサイティングで、楽しくてしょうがない。こんな楽しいことをやめて、引退したら急におじいちゃんになっちゃうのではないかと、今、楽しくてしょうがないので、まだしばらくは、ばりばりの現役でいきたいと思っています。

健康はどうかといいますと、この前、久しぶりにボウリングをやったのです。1 日で何ゲームか投げましたが、そのうちの 2 回はスコア 200 以上出しました。60 代で、アマチュアで、たまにしかやらないボウリングで、1 日 2 回以上 200 オーバー出すというのは、あんまりいないと思うのですよね。結構、僕はスポーツマンなのです。ボウリングの球も結構スピードがあって、ストライクで

ば一んと弾けるのです。まだまだ俺は若いのではないかと、自分で勝手に思ったりしたのですがね。

経営についても、まだまだ新しい技術革新が楽しくてしょうがないということですから、後継者探しは必ずやりますが、もう少し楽しみたいなど。今、絶好調にあるということです。

**質問者 9：**アリババ株を使った先渡し買契約について、今回、短信で一部、現物決済をしたという記載があります。この一連の契約について、私の理解では、現金決済オプションと現物決済が選べて、現物決済を行ったのは、初めてじゃないかなと思うのですが、なぜアリババ株を手離すことを選ばれたのか。上場後、ほとんど売却されてこなかったと思うのですが、何か見方が変わってきたのか、そのあたりのコメントをお願いします。

**孫：**いまだにアリババについては 25%弱保有していますから、現金決済したと言っても、ほんの一部という状況です。われわれが保有しているアリババ株の九十数%はまだ保有したまま。ほんの一部を現物決済したという状況です。

ただ、少なくとも、現金化した部分が SVF の投資に回せるということは、これはこれで SBG の株主だとか、SBG の経営にとっては、財務規律を守りながら投資を続けていく中で、一部、そういうオプションもあっていいのではないかとということで実行したということです。

**質問者 10：**22 年度中にアームは IPO をされるということで、その後の保有方針についてお考えを教えてください。アームには非常に高い成長性が見込まれるということで、基本的には、中長期的にマジョリティーを持つようなお考えでしょうか。

**孫：**アームは本当に、これから黄金期に入っていると思いますので、できるだけ売りたいなど、内心思っているところです。ただ、先ほど言いましたように、SVF1 にはその他の投資家がいいます。SVF1 は 25%保有しています。75%は SBG 自身ですね。その SVF1 の中の、利益の半分ぐらいは SBG 側に入ってくることになっていますので、その辺のバランスを見ながら、これから検討していきたいと考えています。

**質問者 11：**先ほど、アメリカ市場、ナスダックでアームを上場させたいとおっしゃいましたが、アームはそもそもイギリスの会社で、なぜロンドンではなくて、アメリカで IPO を考えているのか。やはり市場の大きさや、国際的な可能性を考えているのか。その辺、教えてください。

**孫：**アームのお客さまは、大半がシリコンバレーの会社です。また投資家も、アームについては非常に高い関心を持っていると聞いています。ですから、そういう意味では、ハイテクの一番中心である、米国のナスダックが一番適しているのではないかなど。若干、可能性があるのはニューヨー

ク市場ですが、おそらくハイテクの中心であるナスダックになるのではないかなと、現時点では考えています。まだ決定ではありません。少なくとも上場するということは、間違いなくやりますが、おそらくナスダックだと思います。